C

讃岐配流後の崇徳上皇を知る

高松市立山田中学校
二年五組　上枝　遥

一　テーマ

讃岐配流後の崇徳上皇を知る

二　テーマ設定理由

昨年、白峯寺（しろみねじ）を訪れ、すぐ近くに崇徳（すとく）上皇のお墓があることを知った。このことから、上皇が讃岐に流された後どこで過ごしたのかなど、詳しく知りたくなった。

三　方法

・崇徳上皇に関する書籍を読む

・『保元物語（ほうげんものがたり）』、『今鏡（いまかがみ）』の、配流となった崇徳上皇に関連するところを引用する

・ウェブサイトで情報を集める

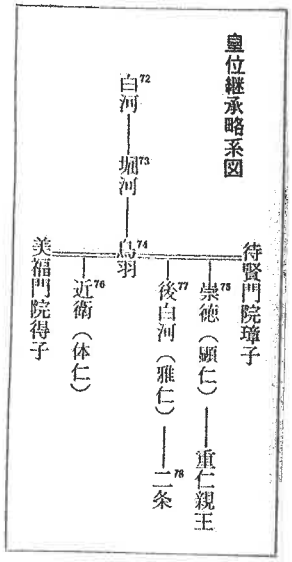
・史跡を訪ねる

四　崇徳上皇について

第七十五代天皇。諱（いみな）（本名・実名）は顕仁（あきひと）。父は鳥羽（とば）天皇で母は中宮・藤原璋子（しょうし／たまこ）（待賢門院（たいけんもんいん））。

一説には白河法皇と璋子の子で、鳥羽天皇には「叔父子」と呼ばれていたという。しかし、その記述があるのは『古事談』のみのようで、真偽は不明である。

一一五六（保元元）年、保元の乱で敗れ讃岐（香川県）に配流。その後、一一六四（長寛二）年に四十六歳で崩御。



↑『鑑賞　日本古典文学　第１６巻　保元物語・平治物語』、永積安明ら全十二名著、角川書店、５１ｐ

五　讃岐配流のきっかけ・保元の乱

崇徳上皇と後白河天皇の皇位継承問題や、藤原摂関家の内紛によって起こった争い。朝廷は崇徳上皇方と後白河天皇方に分かれて対立。

一番のきっかけとなったのは、崇徳の皇子である重仁親王でなく、後白河が即位したことである。

結果は崇徳上皇方の敗北。上皇自身は配流となり、味方の武士が斬首になるなどした。

この戦いは朝廷内部の争いを武士の力で解決した最初の例となった。戦い自体は二、三時間で終わったという。

六　『保元物語』、『今鏡』とは

今回、参考にした資料の中でも、特に注目した二つについて紹介しておこうと思う。

○『保元物語』とは

鎌倉時代の軍記物語。作者不明。全三巻。

改作が繰り返され、伝本（でんぽん）（伝承されてきた原本の写し）が多

今回参考にしたものは、金刀比羅宮蔵本系統の本文をもととしていた。

源為朝（ためとも）の活躍を中心に、保元の乱の様子をえがく。

○『今鏡』とは

平安末期の歴史物語。作者不明。全十巻。

一〇二五（万寿（まんじゅ）二）年から一一七〇（嘉応（かおう）二）年までの歴史を記す。

貴族生活の描写が中心で、政権争いなど当時の政治的・社会的変動に触れることは少ない。

物語は百五十歳を超えるという老婆・あやめの語りによって進行する。

七　崇徳上皇　保元の乱敗北～崩御　概要

源義朝が崇徳院の御所を焼き払い、院方の兵は敗走。院は仁和寺（にんなじ）に逃げ込むが、二日後には天皇方に投降する。

そして、崇徳院は讃岐に配流となる。到着した上皇は、国司代行の綾高遠（あやのたかとお）の屋敷、無人の離島（直島）、木ノ丸殿（こまるでん）（丸太で造られた御所）と御所を移す。

院は、来世のためと五部大乗経（仏の教えを記したもの）を血書した（血で文字を書いた）。それを都近くの寺社に置いてほしいと願うが拒否され、崇徳院の悲愁は憎悪、怨念へと変わる。「日本国の大悪魔」となることを大乗経の奥に血書。この時は舌先を噛み切って流れ出る血で書いたという。

その後は髪も爪も伸び放題で、生きながら天狗の姿になったという。それから八年後（九年後とも）、ついに崩御してしまう。御年四十六。

さて、こうして生涯を終えた崇徳院だが、崩御されてからしばらく経った後、怨霊として恐れられるようになる。なぜ恐れられ始めたのかは後述する。

八　保元物語　関連部引用

『鑑賞　日本古典文学　第16巻　保元物語・平治物語』、永積安明（ながづみやすあき）氏ほか全十二名著、角川書店発行」より、院の配流に関連するところを引用させていただく。本文は中略するところを除きそのままだが、訳は分かりやすいように言い換えているところが多い。

新院御経沈めの事付けたり崩御の事

さても新院（しんゐん）讃岐への御下向（おんげかう）見奉（たてまつ）るこそ哀れなれ。御船中（おんせんちう）もいまいまいまし。月卿雲客（げつけいうんかく）一人も候（さむら）はず、たゞ荒けなき兵（つわもの）ばかりぞ参りける。（後略）

訳　それにしても新院（崇徳院）の讃岐へ行かれるのを拝見するにしても哀れなことである。船中での様子もまたお気の毒なことであった。公卿（くぎょう）（身分の高い役人）は一人も仕えず、ただ荒っぽい兵だけが同行した。

今生（こんじやう）はし損じつ。後生菩提（ごしやうぼだい）のためにとて、御指（おんゆび）の先より血をあやし、三年が間（あひだ）に五部の大乗経を御自筆に遊ばされたりけるを、かゝる遠島（をんたう）に置き奉る事痛ましければ、鳥羽・八幡辺（まんへん）にも納め奉るべきよし、御室（おむろ）の御所へ申させ給ふ。

訳　今の世の人生は失敗した。成仏して極楽に生まれるためにと、御指の先より血を滴らせ、三年の間に五部の大乗経を御自筆なさったのを、このような都から遠く離れた島に置くのが心苦しいので、鳥羽天皇の御墓か八幡山あたりに納めたい旨を、御室（京都市右京区）の覚性法親王（かくしょうほうしんのう）（崇徳院の実弟）のところへお願いなさる。

（中略）関白殿さま〳〵に執り申させ給ひしかども、少納言入道信西、「御身は配所に留らせ給ひ、御手跡ばかり都へ返し入れさせ給はんこと、いま〳〵しく覚え候。その上如何なる御願にてか候らん、覚束なし」と申しければ、主上げにもとや思し召されけむ、御許されなかりける間、力及ばせ給はず。

訳　関白殿がさまざまに仲介されたけれども、少納言入道信西は、「院本人は配所に留まられ、筆跡だけを都へ返し入れになることは不吉に思えます。その上どのような願いを立てていらっしゃるのやら、気がかりでございます」と申し上げたので、後白河天皇はもっともだとお考えになったのか、お許しがなかったので、致し方ない。

新院これを聞こし召されて、「口惜しき事ござんなれ。（中略）後世のためにとて書き奉る大乗経の敷地をだにも惜しまれんには、後世までの敵ござんなれ。さらんに於ては、我れ生きても無益なり」とて、その後は御ぐしをも召されず、御爪をも生やさせ給はず、生きながら天狗の姿にならせ給ふぞ浅ましき。

訳　新院はこれをお聞きになって、「残念なことである。（中略）来世の幸福のためにと書いた大乗経の置き場所さえ物惜しみされるについては、来世までの敵である。そういうことならば、私は生きても無益だ」といって、その後は髪の手入れもなさらず、爪をもお切りにならず、生きたままで天狗の姿におなりになったのはおいたわしい。

（前略）「吾深き罪に行はれ、愁鬱浅からず。速かにこの

功力を以つて、かの科を救はんと思ふ莫太の行業を、しかしながら三悪道に抛げ籠み、その力を以つて、日本国の大魔縁となり、皇を取つて民となし、民を皇となさん」とて、御舌の先を食ひ切つて、流るる血を以つて、大乗経の奥に、御誓状を書き付けらる。「願はくは、上梵天帝釈、下堅牢地神に至るまで、この誓約に合力し給へや」と、海底に入れさせ給ひける。

訳　「私は深い罪を負い、気の憂いは浅くない。速やかにこの写経の善行の力をもって、あの謀叛の罪を救おうと思う莫大な行為を、全て三悪道に投げ込み、その力をもって、日本国の大悪魔となり、天皇の位を奪って民とし、民を天皇としよう」といって、舌を食い切って、流れる血で大乗経の奥に、誓いを書きつけられる。「願わくば、上は梵天、帝釈天、下は大地の神に至るまで、この誓いに力をかしてください」といって、海底に沈め入れられた。

その後九か年を経て、御年四十六と申しし長寛二年八月二十六日、終に隠れさせ給ひぬ。やがて白峰といふ所に渡し奉る。さしも御意趣深かりし故にや、焼き上げ奉るけふりの末も都を指して靡きけるこそ怖しけれ。御墓所はやがて白峰に構へ奉る。この君当国にて崩御なりしかば、讃岐院と申ししを、治承のころ怨霊どもを宥められし時、追号有つて、崇徳院とぞ申しける。

訳　その九年後、御年四十六という長寛二年、ついにお隠れになった（崩御された）。やがて白峰という所にご遺体を移し奉る。そのように御執念が深かったためであろうか、焼き上げ奉る煙の先も都を指して靡いたのは恐ろしいことだ。御墓所はそのまま白

峰に構え奉る。院はこの国で崩御されたので、讃岐院といっていたのを、治承のころ怨霊どもの心を和らげられたとき、追号の事があって、崇徳院といった。

九　今鏡　関連部引用

『今鏡全注釈』、河北騰（かわきたのぼる）氏著、笠間書院発行」より、前述と同じく、今回調べたいことに関連するところを引用させていただく。

今鏡　二　すべらぎの中

八重の潮路

（前略）新院御髪おろさせ給ひて、御弟の仁和寺の宮におはしましければ、暫しはさやうに聞えし程に、八重の潮路を分けて遠くおはしまして、上達部・殿上人一人参るもなく、一宮の御母兵衛佐（ひょうえのすけ）と聞こえたマヒし、さらぬ女房一人二人ばかりにて男もなき御旅住みもいかに心細く、朝夕に思し召しけむ。（後略）

訳　（保元の乱に敗れた）崇徳院は剃髪され、弟君である覚性法師（かくしょうほうし）がおいでの仁和寺へ身をひそめられました。院は当分そうしておいでと聞きましたが、遥かに遠く海路を辿られる事となり、上達部や貴臣たちの従う者一人もなく、ただ、一宮（重仁親王）の母・兵衛佐と、断り切れない女官一人二人だけで、男の従者もない心細い幾日間を過ごされたのでありました。

あさましき鄙の辺りに九年ばかりおはしまして、憂き世の余りにや、御病も年に添えて重らせ給ひければ、都へ還らせ給ふ事もなくて、秋八月二十六日にかの国にて失せさせ給ひにけりとな

む。（後略）

訳　呆れてしまう位に辺鄙な田舎に九年程おいでになり、御心労の余りでしょうか、御病気も年ごとに重くなられました為、都へお還りもなくて、秋八月二十六日に讃岐国でついに亡くなられたとのことです。（後略）

十　『保元物語』、『今鏡』比較

ここで、引用した部分の二つの違いについてまとめようと思う。この二つの資料はどちらも「物語」なので脚色されている事実もあるはずだ。しかし、ただ引用するだけでは読むのが面倒なだけなので、共通点（似ている点）と相違点を挙げていく。

まずは共通点。上皇の配流、配流時の様子を憐れんでいる点は同じである。引用では省略しているが、『保元物語』には同車した女房たちが泣く様子、上皇の嘆きなどが描かれており、よりいっそう悲嘆の様子を引き立てている。

次に相違点。配流後の暮らしの様子の描写は全く違う。『保元物語』は、讃岐国のどこに住んだか、何をして過ごしたかなどが書かれている（割と長めの描写だったので省略）。一方『今鏡』には、讃岐国に来てから九年後に崩御されたことぐらいしか書かれていない。配流後の情報量があまりにも少なく驚いた。

だが、一番意外に思ったのは「五部大乗経」について一切触れていない点である。『保元物語』には大乗経を血書したことから、激しく怒り「日本国の大悪魔となる」と誓った事まで書いてある。しかし『今鏡』には、「憂き世の余りにや…」とあるように、悲しみの余り病気が年々重くなったというだけで、配流に対する激しい怒りや恨みは見受けられないのである。

十一　怨霊伝説

崇徳院は、今日（こんにち）では菅原道真、平将門と並ぶ日本三大怨霊としても知られる。保元の乱で敗北し、軟禁状態で生活していた彼が、怨霊として恐れられるようになったであろう原因を挙げてみよう。

・後白河院・藤原忠通の親戚が三か月ほどの内に続けて亡くなった

安元（あんげん）二年（一一七六）の夏。保元の乱で崇徳院と敵対した二人の親戚が四人も続けて亡くなってしまうのである。院は異母妹、自身に仕えていた女御（にょうご）（高い身分の女官）、そして孫を亡くす。忠通は養女を亡くす。四人は皆院号（「院」の字がつく称号）を所有していた。現代でも親戚関係にある人物が数か月の内に複数人続けて亡くなったら、何か不吉な事があるのではないか、と考える人が多いだろう。

・内裏（天皇の住む場所）が火事で焼けた

安元三年（一一七七）の四月二十八日、京が大火に見舞われた。午後八時ごろ樋口富小路（ひぐちとみのこうじ）の病人の家から出火し、平安京の三分の一が焼失。その中には、内裏も含まれた。

「内裏が焼けた」、となれば、菅原道真が連想される。彼もまた、怨霊として恐れられた。延長（えんちょう）八年（九三〇）、雷が内裏の清涼殿（せいりょうでん）（私生活を送る場所）を直撃し、醍醐天皇を震え上がらせたという。そして、この出来事は菅原道真の怨霊の仕業、という話が広まった。落雷による死傷者も出ている。

このような異変は崇徳上皇並びに藤原頼長（保元の乱では上皇方についた）の怨霊によるものだ、とされたようだ。七月二十九

日、上皇には「崇徳院」の号、頼長には「正一位太政大臣」が朝廷からおくられた。

半井（なからい）本『保元物語』には、平治の乱の勃発や清盛が軍事クーデターを起こしたこと、後白河院を幽閉したことを、「讃岐院の御祟（おんたたり）」と書いているらしい。今回参考にした資料は金刀比羅本を底本としているため、その描写を実際に読むことは出来なかった。だが、これはこじつけのように思う。

十二　崇徳上皇伝説

「『新・讃岐百物語』、矢田一郎氏編、発行」より、崇徳上皇に関する伝説を紹介する。

後述する史跡の内の、高屋神社（血の宮）と青海神社（煙の宮）に関係する話である。

第３９話　血の宮・煙の宮

〔要約〕

讃岐の国に配流となった崇徳上皇は、鼓ガ岡御所にて大乗経の写経をする毎日を過ごしていた。完成した写経を都に送るも、送り返されてしまい奉納することは叶わなかった。

この頃から上皇の御気力はめっきりと衰え始め、八月のある日、静かに息を引きとられた。

御遺体を火葬場まで運ぶ途中、高屋の里あたりで激しい雷雨に見舞われた。それで、柩（ひつぎ）を近くにあった六角の石の上に置き、雷雨が静まるまで待つことにした。

半刻（とき）（約一時間）もすぎた頃、雨は小止みになった。柩を持ち上げると、置かれていた六角石にうす赤く血が流れているのだった。

御遺体から滴った血だろうか。どこにも損傷のなかったお体のどこからの出血なのか、葬列していた者たちは皆、息を呑んだ。

御遺体は白峰の稚児（ちご）ノ滝で荼毘にふされた。煙は、天空の一点をめざし真っすぐに昇るのだった。葬列者も里人（さとびと）も、一斉に地に伏してこの煙に手を合わせた。

後世、御遺体から血の滴ったあたりは血の宮、白煙の立ちのぼったところは煙の宮として、土地の人々は祀（まつ）ったという。

十三　崇徳上皇ゆかりの史跡めぐり

○高屋（たかや）神社（血の宮）

前述したとおり、この近くの地で暫くの間棺を六角石の上に置いたところ、棺から血が滴った。葬儀終了の後、高屋神社に六角石（御棺臺石（おひつぎだいいし））を納め、崇徳天皇の霊を祀ったという。

参道には「血の宮」と刻まれた石碑がある。

御棺臺石は今も境内にある。

○白峯寺十三重石塔

この石塔は、源頼朝が崇徳天皇の菩提のために建立したと伝えられる。東西両塔はそれぞれ材質、工法が異なる。重要文化財に指定されている。

写真は西塔。角礫凝灰岩製のため、東塔より礫（つぶて）が多く、より傷んでいる。東塔は花崗岩製である。

（参考・石塔付近の看板・白峯寺護持会、坂出市教育委員会）

○白峯寺（しろみねじ）

四国八十八カ所第八十一番札所。弘法・智証（ちしょう）大師によって開かれたと伝わる。

・勅額門（ちょくがくもん）

左側に源為義（ためよし）、右側に源為朝（ためとも）の武者像がある。普段は扉が閉められ見ることはできない。正面にかかげられている扁額（へんがく）はレプリカ。実物は後（ご）小松（こまつ）天皇の直筆で、宝物館に収蔵されている。

・頓証寺殿（とんしょうじでん）

崇徳天皇の霊魂を祀る場所。現在の建物は江戸時代に再建されたもの。拝殿は檜皮葺（ひわだぶき）、蔀戸（しとみど）（上下に分割された戸）で、庭前に橘と桜を植えて、京の御所を真似ている。

・相模坊大権現（さがみぼうだいごんげん）

白峯山に住むと伝わる、日本八天狗の一狗、相模坊の像。白峯山、崇徳天皇の守護神としても有名である。

（参考・像真横の看板）

・西行（さいぎょう）法師の像

崇徳院の御陵に詣でた西行法師の像である。像の下の石は「西行腰掛石」と伝えられるもの。

像の傍らにはサヌカイトに刻まれた西行の歌碑がある。

よしや君昔の玉の床とても　かゝらん後は何にかはせん

（意味）たとえ貴方が昔、玉座についておられたとしても、こんなお姿（死者）になられた以上、ただ成仏を祈るだけです。

・白峯寺本堂

○白峯御陵

崇徳上皇が葬られた御陵。陵は積み石の方墳であったといわれている。現在の陵は江戸時代に修復が重ねられた末のもの。

○青海（おうみ）神社（煙の宮）

白峯山のふもとにある神社で、西行法師の道のスタート地点でもある。たなびいた煙がこの地に降りて文字となり、消失した後に一つの玉が残った、という前述とは違う伝説もあるようだ。

こちらも参道に「煙の宮」と刻まれた石碑がある。

○西行法師の道

西行法師が白峯御陵を訪れたときに通ったとされる、青海神社から白峯御陵までの参道。

道沿いには法師や崇徳院が詠んだ歌を刻んだ八十八基の歌碑と、九十三基の石灯篭が設置されている。

○雲井（くもい）御所跡

崇徳院が讃岐へ到着された当時、仮の御所としたのが、雲井御所であるとされている。ここはもともと当地の国司代理・綾高遠（あやのたかとお）の館であった。

この場所で上皇が詠まれた、

ここもまたあらぬ雲井となりにけり
空行く月の影にまかせて

という歌にちなんで、雲井御所と呼ばれるようになったそうだ。

○鼓岡（つづみがおか）神社

上皇が御所とされた木（こ）の丸殿（まるでん）のあった場所。崩御されるまでの六年余りをここで過ごされたという。

擬古堂（ぎこどう）

この建物は大正二年（一九一三）の崇徳上皇七百五十年大祭に合わせて造られた。

かつてこの地にあった木（こ）の丸殿（まるでん）（丸太で造った御所）の雰囲気を模して造られているため、擬古堂と呼ばれる。

杜鵑塚（ほととぎすづか）

ある日上皇がほととぎすの鳴く声を聞いた。その声で都を思い出し、

啼（な）けば聞く聞けば都の恋しさに　この里過ぎよ山ほととぎす

と、詠まれたところ、ほととぎす自らさえずるのをやめたという言い伝えがあるそうだ。

しかし、塚近くの看板には、「里人がほととぎすを殺したり、追い払ったりしたので、のちにホトトギス塚をたてて、供養した」とある。ほととぎすが自ら鳴くのをやめたわけではなさそうである。

○柳田（やなぎだ）

ここは崇徳上皇が殺害された場所といわれる。

しかし、江戸時代の地誌・『讃州府誌（さんしゅうふし）』には、二条天皇に暗殺を命じられた武士に殺害されたと書かれているらしい。ただ、かなり後の時代に書かれたその本が信頼できるものかは不明。

写真では分からないがこの石碑はＪＲ予讃線沿いにある。

○白峰（しろみね）神社

今まで挙げた史跡は全て坂出市にあるものだが、この白峰神社は金刀比羅宮の御本宮から奥社までの間、つまり琴平市にある。

崇徳天皇が祀られており、ここにも源為義・為朝親子の像があるそうだ。

崇徳天皇は配流後に金毘羅大権現を崇敬し、境内の「古籠所」に参籠（さんろう）敬し、境内の「古籠所」に参籠（さんろう）（祈願）されたそう。

十四　まとめ

今回調べたことについて、だいぶ簡単にはなるがまとめておく。

・配流後、今の坂出市や直島で暮らしていた。
・晩年の様子については、荒れていたという説と穏やかだったという説がある。
・京を恋しがりながらも二度と帰ることなく崩御された。
・怨霊として恐れられるまでの経緯は、菅公とよく似ている。
・崇徳院を祀る寺社が香川には複数ある。

十五　考察・感想

○「叔父子」は真実か

崇徳天皇は白河法皇の子である、という説。話の本筋から逸れてしまう上、長いしややこしくなるので詳しくは取り上げなかった。だが、保元の乱のきっかけを辿っていけば、「叔父子」として嫌われていたことがおおもとなのではないだろうか。

崇徳天皇の母・待賢門院璋子（たいけんもんいんたまこ）は、白河法皇の名義上の子であったという。叔父子が事実なら、崇徳上皇は名義上の父との間に産まれた子、ということだ。産まれたときから崇徳上皇は鳥羽天皇に嫌われる要素があったという事にもなる。産まれたその時から嫌われる運命にあった上皇が不憫である。

そしてこの璋子、「叔父子」問題のほかにも、乱脈な行いが目立っていたようである。『殿暦（でんりゃく）』に当時の関白・藤原忠実（ただざね）が記録しているらしいのだ。当時よく知られていることだったのなら、鳥羽院も勿論知っていたはず。彼が実は叔父にあたる第一皇子・崇徳天皇に近衛天皇への譲位を迫ったのは当然なのかもしれない。

だが、鳥羽天皇と璋子の間には五男二女が産まれている。夫婦仲は険悪ではなかったのだろう。だとしても、その七人全員が本

当に二人の子であるかは疑問だ。崇徳院のみ鳥羽院の子でないと思われていたようだが、本当にそうなのか。崇徳院もほかの六人も、別の誰かの子なのでは、と思ってしまう。

璋子が入内（じゅだい）した日や七人の子どもらが産まれた日が分かれば何か新たな発見があるのかもしれないが、残念ながら今手元にはそれを確かめられる資料はない。

どこからが当時の事実かは分からない。「叔父子」の話が全くのでたらめという可能性もあるのだ。でたらめだったならそれはそれで、疑わしい行動があったのだろう。何をきっかけに「叔父子」の話が生まれたのか、気になるところである。

○美福門院（びふくもんいん）の策略

藤原得子（なりこ）（美福門院（びふくもんいん））。彼女は鳥羽天皇の御后である。そして彼女は、後白河天皇即位に関わっているのだ。

近衛天皇が病没。次の天皇は崇徳院の第一皇子・重仁（しげひと）親王が選ばれるだろうと誰でもが思っていた。だが、実際即位したのは雅人親王。後白河天皇だったのである。

美福門院は、皇子の近衛天皇が崩御したのは、崇徳院の呪詛のせいだという噂を信じていた。それで崇徳院を恨み、鳥羽法皇に噂の事を訴えた。その結果として問題にもされなかった後白河が即位することとなったのである。（『保元物語』参照）

呪詛のせいだと信じ切っていたかのようだが、「自身の立場のため」ではないのか。重仁親王が即位すると、崇徳院が院政を行うだろう。そうなれば自分が自由に行動できなくなるかもしれない。そう案じてのことではないだろうか。

ちなみに、呪詛したとして疎外されたのは藤原頼長もおなじである。美福門院は彼にも同じ疑いをかけ、鳥羽法皇に奏上したのだという。のちに頼長は崇徳院と組み、保元の乱へと駒を進めるのだ。

ここでは美福門院についてのみ触れたが、藤原忠通、信西（しんぜい）（後白河の乳父（めのと））らの策略もあったようである。

○流刑（るけい）

流刑は律（刑法）で定められた五刑の一つ。死刑の次に重い刑である。京都からの距離で遠流（おんる）・中流（ちゅうる）・近流（きんる）に分けられていた。

崇徳院が流された先は讃岐（香川県）であった。同じ四国の三県は、徳島・高知が遠流、愛媛が中流だったという。徳島が遠流で愛媛が中流なのはおかしいと思うが、とにかく讃岐の地も遠流（中流）だったのだろう。

崇徳院は身分が高かったために、食べ物や住居に困らなかったのかもしれないが、そうでない者は特に食べ物に困ったそう。流刑者は見知らぬ場所に送られ自分で生活しなくてはいけなかったので当たり前かもしれないが。

ところで、流刑地はどうやって決めていたのだろうか。崇徳上皇は内紛を主導したことが原因で流刑となったのだろう。なぜ讃岐に流されたのか、そもそも流刑地は具体的にどう決めていたのか。そして歴史上多くの人が流された場所はどこなのかなど、流刑についても詳しく調べてみたい。

参考図書

香川県立図書館

・『鑑賞　日本古典文学　第16巻　保元物語・平治物語』永積安明（ながづみやすあき）氏ほか全十二名著、角川書店発行

・『今鏡全注釈』河北騰（かわきたのぼる）氏著、笠間書院発行

・『新・讃岐百物語』矢田一郎（やだいちろう）氏編、発行、中央印刷所印刷

自宅の本棚にあったもの

・『日本の歴史６―武士の登場』竹内理三　氏著、中央公論新社発行

・『妖怪と怨霊が動かした日本の歴史　なぜ日本人は祟りを怖れるのか』田中聡　氏著、笠間書院発行

・『講談社　学習まんが　日本の歴史５　貴族の栄華』遠藤慶太　氏監修、池沢理美　氏漫画、講談社発行

・『講談社　学習まんが　日本の歴史６　源平の争乱』呉座勇一　氏監修、神宮寺一　氏漫画

参考にしたウェブサイト

・「綾松山　洞林院　白峯寺」「四国八十八ヶ所霊場」
https://88shikokuhenro.jp/81shiromineji/

・「白峯寺」「坂出市」
https://www.city.sakaide.lg.jp/soshiki/bunkashinkou/siromineji.htm

・「崇徳上皇」「坂出市」
https://www.city.sakaide.lg.jp/soshiki/bunkashinkou/sutokujyoukou.htmi

・「金刀比羅宮　―　参拝ガイド　奥社編」「金刀比羅宮」
https://www.konpira.or.jp/articles/20200616_guide_inner-shrine/article.html

作品の裏面に貼付してください。

↓個人提出の場合は記載不要です

「第13回 高松市 図書館を使った調べる学習コンクール」 作品応募カード	学校用受付番号（学校記入欄）	作品番号（事務局記入欄）	
	3	中・夢・牟 国・香	受付No 8

部門	（□に✔を入れてください。） □小学校1・2年生の部　□小学校3・4年生の部 □小学校5・6年の部　☑中学生の部
タイトル	讃岐配流後の崇徳上皇を知る
ふりがな 氏名	うえ えだ はるか 上枝 遥 ※作成者が複数の場合は全員の名前を記載してください。
学校	高松市立 山田 小学校／中学校 [2]年生

切り取り線